るオオサトメシダについて，特にその胞子の形態を再検討し，この形成状態，発芽能力および胞子嚢などを観察し，これらの結果から，倉田と同じ結論に達した。

オオサトメシダ胞子の主な形状は，殆んど球状に近い腎状体である。しかし不定形の胞子も多くみられた。その表面は多数のイボ状物がある。この胞子の大きさは大小不揃であった。川崎の発表したオオサトメシダの胞子の形状は，腎状楕円体，その表面は無突起であるので，この両点において，筆者の観察結果は異なった。

このシダの大多数の胞子嚢は不稔性である。稀には成熟するものがあり，この胞子嚢内には，16 個の胞子母細胞が観察された。この胞子母細胞の減数分裂において，赤道板に 1 価染色体が残されているのがみられた。胞子嚢内には，16 個の胞子が観察された。これは特異な胞子形成と思われる。このシダの多くの胞子嚢は不稔性であり，稔性胞子の形成は少量であるから，胞子の採集は困難であった。この胞子の発芽能力は非常に劣る（発芽率は 1%—8%）。多数の不稔性胞子嚢があり，胞子の主な形は球形腎状体，その大きさは不定などは，オオサトメシダの特性の一部にあげられよう。またそれらの点では平常であるサトメシダとの区別点にも数えられる。

以上列挙した胞子の形状，大きさ，その形成状態，発芽能力の劣ること，多数の不稔性胞子嚢の存在などの諸観点から考察して，オオサトメシダの起源は雑種であるとの疑がある。

□Riley, H.P. **Families of flowering plants of Southern Africa.** pp. 269, pls. 144. University of Kentucky Press (1963). 著者はケンタッキー大学の細胞遺伝学の教授で，染色体の方面から南アフリカの高等植物に関心を持ち，1955 年にフルブライト交換教授として，南阿連邦に滞在した時の資料を主に整頓したものである。範囲は南阿連邦に限らず，アンゴラとモザンビクとを結ぶ以南の植物を一応網羅し，ハッチンソンの分類系に準じて排列，各科の特徴，科中の所産の各属を列挙し，可成り詳しい分布を述べ，なお染色体数と利用面をも附記する。純粋の分類書ではなく，挿入のカラー写真と相俟ってフロラの大綱を知るにはよい。写真はほとんど草本なので，下記の Palmer 及び Pitman 両氏の「南阿樹木誌」を併用されると一層よい。$14.00（前川文夫）

□Palmer, E. & Norah Pitman: **Trees of South Africa,** pp. 352 pls. color. 31. photo pls. 148. A. A. Balkema, Amsterdam & Cape Town (1961). 少し古いが面白い本なので紹介する。南阿連那の主要樹木を扱ったもので専門書ではない。第一部 111 頁で，歴史的展望，保護，分布，南部の Knysna 地方の樹木の検索表，特徴を抄出した種類毎の表，名のいきさつ，雨を呼ぶ木，栽培，役に立つ木などが述べてある。第二部に入るとハッチンソンの "A Botanist in South Africa" に準じて 59 科，174 種について，どちらかというと民俗植物学的に楽しい記述がされている。写真は主に樹形を写し，多数のしゃれた挿画は細部を描く。土語も多く載せ，終りに 65 ケ所の自然保護林の地図もよい参考となる。（前川文夫）